

長岡税務署長賞

命を守る税

新潟県立長岡高等学校

二年 高橋 夢翔

私は医療系のドラマや映画が大好きだ。SFや特撮の世界に出てくるのとは違う、身近なヒーローだからだ。難しい手術をする医師は勿論のこと、迅速に現場に駆けつけ患者の容態を判断し、病院に搬送してくれる救急隊員も、私のヒーローだ。

春、陽気の良い日曜日、私の祖母が庭の草むしりをしていて蜂に刺された。前にもさされたことがあったのを覚えていた母が、あわてて救急車を呼んだ。ショック死する危険性があるからだ。祖母の顔はみるみる青ざめていき、私はただ涙を浮かべておろおろしているだけだった。どうしよう、どうしよう。その時、救急車の音が聞こえて、本当に嬉しかった。祖母は病院に搬送され一命を取り留めた。さつきとは違う涙が出た。

119番をすると救急車が駆けつけてくれて、病院に運んでくれる。当たり前のことだけど、これも私たちを含めて国民が納税しているおかげで、24時間365日年中無休で対応してくれる。しかも無料だ。税金が使われなければ、救急車を呼ぶために個人で費用を負担しなければならない。救急

車1回の出勤にかかる経費は平均で5万円程度だと聞く。家族の命のためであれば出勤費用を払うのは当たり前かもしれないが、それが出来ないような生活をしている人も多いと聞く。命とお金を天秤にかけるなど酷い世界であり、想像するだけでぞっとする。

私たち国民の命を守るのは救急隊だけではない。火事が起きたとき迅速に駆けつけて消火してくれる消防隊や、各種災害、もちろん中越大震災の時にも人命救助や障害物の撤去など特殊な作業をしてくれる自衛隊や、ストーカーなどの犯罪から私たちを守ってくれる警察官など、これらの方々も皆、私たちが直接お金を払うことはないが、日々私たちを守ってくれている。

しかし税金は無限ではない。このまま少子高齢化が進むと、当然納税者が減少し、こういった公共サービスが維持されるのかどうか不安でもある。維持していくためには私たちが職業につき、きちんと納税するのは勿論のこと、納税者としてその使い道をしっかり監視するのも重要な役目だと思う。私たちがそういった意識を持ってこれから生活していくことで、自然と自分の命を守ることにつながるのではないかと思う。